丹後の廃村現象から考える
——暮らしの豊かさとは

①

企画展

サンパチ

—豪雪と山村の暮らしをめぐる60年—

2022 Kyoto Prefectural
Tango Regional Museum
Special Exhibition

②

SANPACHI

—Sixty Years of Heavy Snowfall and Mountain Villages—

③

2022年 12月24日(土)－2023年 4月9日(日)

休館日　月曜日(1/9は開館して翌日休館)、年末年始(12/28～1/4)
開館時間　午前9時～午後4時30分
入館料　一般200円 小中学生50円
団体割引(20名以上) 一般150円 小中学生40円
○ただし、次の方は無料
満65歳以上の方、障害者手帳などをお持ちの方とその介護者
小中学校等の学校教育活動の場合
○「きょうと子育て応援パスポート」が利用可能

ふるさとミュージアム丹後
(京都府立丹後郷土資料館)
〒629-2234　京都府宮津市字国分小字天王山611-1　TEL.0772-27-0230　FAX.0772-27-0020

海の京都　文化庁京都へ

豊富な雪解け水が暮らしを潤す糧となる

川へカゴモミ（和紙の原料加工）に向かう女性
（宮津市畑　昭和55年）

箱ソリ（宮津市畑　昭和時代）

実りの豊かさ

収穫（宮津市木子　昭和28年頃）

文化的な豊かさ

筒川祭の神楽（伊根町菅野　平成28年）

スキー板
（宮津市木子　昭和時代）

昭和38年（1963）1月前後にかけて、大陸からの強い寒気団が日本列島を襲い、丹後半島は山間部を中心として未曾有の大雪に見舞われました。それは後に“昭和38年1月豪雪”または“サンパチ豪雪”と呼ばれ、今なお語り継がれています。この記録的な雪害の経験が引き金となり、山村に暮らす人々の離村が急速に進んだとされます。ただし、彼等が離村を選択した背景には、高度経済成長にともなう暮らしの変化、労働や子供の教育に関わる問題、資本主義経済や過疎化の影響等といった複雑な要因があったものと考えられます。

本展では、サンパチ豪雪から60年の節目に因み、山村の暮らしや文化を見つめ直す試みとして、当館が50余年に渡って収集してきた山村生活用具等を展示します。本展を通じて、“暮らしの豊かさ”とは何か、“丹後の廃村現象”から私達は何を学ぶ事ができるのか、という事について考えたいと思います。

経済的な豊かさ

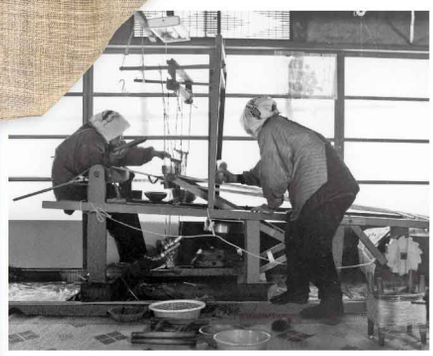
日本政府宝くじ
（京丹後市丹後町小脇　昭和24年）

メシガマス〔山行きの弁当入〕
（宮津市上世屋　昭和時代）

住山の離村者
（京丹後市弥栄町野中　昭和40年代）
『明治・大正・昭和の丹後』から転載

ヤマギ〔仕事着〕（宮津市上世屋　昭和56年）

冬の稼ぎと仕事——



藤布を織る（宮津市上世屋　昭和56年2月）

◎関連イベント　Related Events

講演会
「消えない村－京丹後の離村集落とその後－」

日　時　1月28日（土）午後1時30分～3時
定　員　30名
講　師　小山　元孝さん　福知山公立大学地域経営学部教授・NPO法人TEAM旦波

講演会
「旧世屋・野間の人々のくらしの中のいのり」

日　時　3月11日（土）午後1時30分～3時
定　員　30名
講　師　小野　泰昭さん　元与謝野町文化財審議委員会 会長

最新情報はこちらをチェック！

HP（ホームページ）　Instagram（インスタグラム）　Twitter（ツイッター）

表面画像キャプション
①雪に埋もれた上世屋の家屋（宮津市 昭和38年　中嶋利雄撮影）
②木子の古老（宮津市 昭和20～30年代　和田敬之助撮影）
③左から藤織りの達人・光野ためさん、コンニャク作りの名人・田上寿枝さん、カンジキ作りの名人・田上逸郎さん（昭和～平成時代）

交通のご案内 ACCESS
・京都丹後鉄道宮豊線「天橋立駅」または「岩滝口駅」から丹海バス伊根方面行き「丹後郷土資料館」下車。または「国分」下車徒歩5分
・「与謝天橋立IC」から車で10分

主な展示品
●丹後の紡織用具及び製品（重要有形民俗文化財）
●丹波・丹後の手漉き和紙生産用具（京都府指定有形民俗文化財）
●丹後の山村生活用具
●へき地教育関連資料

紙すき同好会による紙漉き（於旧永島家住宅）

◎関連展示　Related Exhibits

紙すき同好会作品展
（丹後郷土資料館友の会サークル）

会　期　3月23日（水）～4月2（日）
場　所　旧永島家住宅（当館）

和紙人形

宮津市畑の伝統的な手漉き和紙技術を継承し、30余年にわたって活動を続ける会員の作品を展示します。